

想流とはさげ下地なるべし、片はづしの如く見ゆる鬢の笄を拔ば下髪となる。是も形の變ずる故、如此名づけしにやあらん。

## 小兒頭髮風

〔松屋筆記 六十七〕髮の貌

按に、万葉の歌、伊勢物語の歌などに、たぐとも、あぐともよみたるを、合せ考るに、女兒はじめは目刺にて、八歳より童放にし、それよりや、十二三にもなれば、頂結放にもし、人に嫁に至ては、結髪せし也、頂結放は半元服などいふ類なるべし。

〔松屋筆記 百三〕振分髪

按小兒生て七日許にはじめて胎毛を缺取を棄髪といふ、然て二三歳までは羅髮の體也、それより髮置とも、深曾木とも、尼曾木ともいひて、肩のほどにくらべて髮の末を缺取、八歳まで此體にであるを、和良波とも、振分髪ともいふ、和良波は髮の下端のわらくと亂垂たるよりいふ名、振分髪は、項より左右の頬に、毛の分れ下れるよりいへる名也、八歳の後は、女童はや、毛を延して、肩を過ぐる許に下げ、中間の毛を取分て、頂上にて束ね結ひ、宇奈爲とす、束髪を宇奈爲といひ、廻りの垂下れる振分髪を波奈利といふ、宇奈爲波奈利とは、二ツを合せて呼る名也、こ、は女兒の歳いまだ十三四にもいたらずして、擧て女の體に成には、短き振分髪なれば、春草を假髪にして、か擧結らんと、思ひやりてよめる也、多久は手操にて、手操て、髮擧する事也。

伊勢物語 段 廿三

くらべこしふり分髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかなづべき、按果句諸本たれかあぐべきに作れるはよろしからず、今は朱雀院塗籠御本に据る、こは万葉集十三卷廿四丁長歌に、歳乃八歳、叫鑽髪乃、吾何多髮過、橘末枝乎過而、此河能下文長、汝情待とあるを據にてよめる歌也、おもふに、振分髪も肩過ぬといひ、男をおもふ心も切なれば、女兒十一二歳許の時の歌なるべし。